外国語としてのロシア語の国家教育基準
（初級レベル）について（2）

トルストグーゾフ アレキサンダー*1

外国語としてのロシア語教育の現代の理論と実習における、教育の主な目的は、学習者が定めたレベルを達成することとして定義される。
数年前に、外国語としてのロシア語検定試験システムがロシアに取り入れられた*2。この検定試験は、ヨーロッパの統合プロセスとロシアの社会変遷と政治情勢、他の言語における能力レベルの分離とその証明化に伴って、外国人の人々によるロシア語能力を測る必要があると考えられたため、もたらされたものである。

その問題の中で重要な役割を果たしたのは現代的方法論の発展である。現在のところ、今までに存在した多くの方法論の定型的修正を行っている。現代の言語方法論の新しいトレンドとしては、教育者に対して自分で勉強できる能力を身につけること、彼らの教育のために緊急要件や動機付けプレゼンを形づくること、彼らがロシア語を選んだ目的を考慮すること、この目的に合わせた教育資料の配布、教育課程を最大限に個人化させる教育の柔軟なモデルの作成などを行うことが求められている。これらの要因は、外国人のコミュニケーション能力を明らかにするため統一された、独立で、規範化された、多レベルテストのシステムの開発と導入を可能にした*3。言い換えると、多くの外国人がロシア語の自分のレベルを測り、その成績の証明書を受けたいと願っているからである。

言語のレベルの分離に伴って、各レベルでの能力の精密な測定方法の開発が必要とされた。
外国語のテストは世界的な言語レベルの確定のために使われる。しかしながら、ロシアで1990年代前半に外国人にロシア語を教えたとき、言語テストはテスト形式での個別の課題だけで使われた。

1990年代の半ばごろ、モスクワ国立大学、サンクト・ペテルブルク国立大学、国際友情ロシア大学などの専門家の努力によって、アメリカのTOEFLのような外国人のためのロシア語能力検定試験システムが開発された。
このシステムの目的は、外国人言語能力の精密な測定と、その証明のための経済的及び効率的な方法の開発である。現在、ロシア語能力検定試験は、実験能力の6段階の試験がある（初級レベル、基礎レベル、第1レベル、第2レベル、第3レベル、第4レベル）にビザビジネスロシア語と専門ロシア語の試験がある。

各言語レベルの能力の内容と標準的なテストの断章は、各レベルの"外国語としてのロシア語の国家教育基準" (Государственный образовательный стандарт по русскому языку как иностранному)に含まれる。ロシア連邦教育法の第7条により、国家教育基準は、各レベルのロシア語の総合能力に対して最低限の要求を提示される。将来的に"基準"を"要求"と言う名前を改める予定がある。

"基準"は様々なロシア語の教授科目を含む。したがって"基準"は教育課程で積極的に利用することが可能である。ここで言う言語の内容は例で示されるもので利用が簡単である。"基準"は、外国語としてのロシア語の初級レベルの能力、総合文法の目的と次の（基礎）のレベルの達成のために十分な、そして必要な知識と定義づけられる。
"基準"の存在が教育のシステムの改良の最も重要な条件として考えられる。"基準"は、各レベルにおいて、教育の目的と内容に必要不可欠な義務的な能力の記述であると解釈される。しかし、

※青森公立大学
「国家教育基準の認定の結果は会議においても、方法論的雑誌においても真剣な分析を得なかった」という言葉は、非常に公正な意見である。

初級レベルの基準が示しているように、このレベルそのものから他のレベルと比べて比較的後
に分離されたからである。1999年の第1
版、2001年の第2版ともに、このレベル
が基礎レベルに含まれると述べられている。
初級レベルを独立させることが、21世紀の最
初の10年代半ばの、専門家の間での長いたずら
後の決定であった。これは、テストシステム全
体で最も要求される、ロシアの大学や大学院
の外国人入学希望者に義務化されるレベルが、
第1レベルであるという事情によって規定され
た。しかし、ロシアの大学院の入学を希望しない、
母国でロシア語を専門的に勉強する希望を持た
ない多数の外国人のために、かなり高い能力を
要求する基礎レベルだけのテストの存在は、自
身の能力の客観的な指標を得ることを妨げたの
である。著者の意見では、初級レベルの分離と
証明書の発行は完全に正当なことである。
しかしながら、初級レベルのステータスにはある程
度の暖昧さが残る。すなわち、1999年の第
1版の初級レベルの基準と基礎レベルの基準の
titleに"案"は入ったが、2001年の第2
版に基礎レベルの名前からこの単語は削除され、
初級レベルのタイトルにそれはそのまま残って
いた。将来、再版のときに"案"の削除は望まし
い。

各レベルの基準は三つの部に分けられる。第
1版と第2版の初級レベルの国家教育基準の1
部"言語の伝達の内容"で、このレベルの外国語と
てのロシア語の総合能力への要求が規定され
る。1部の1章で外国の教育者の言語能力の内
容が説明され、外国人学習者がコミュニケーション
を行うときに口頭で実践することができる内
容が示される。

そこにはすべてのタイプの内容が4つのグルー
プに分かれている。第一のグループの内容はス
ピーチエチケットのことである。ただしその以下
の技能を含む。コミュニケーションを始める
こと、挨拶をすること（Здравствуй-
te）、別れの挨拶をすること（Досвид
ания）、自己紹介をすること（Меня
зовут...）、だれかを紹介すること（Это
мой друг. Его зовут...）、問い合わせ
うこと（Извините, скажите, пожа
луйста）、感謝すること（Спа
сибо）、お詫びすること（Изви
ните）、感謝とお詫びに対して答えること（Ниче
го, пожалуйста）、繰り返すようにお願い
すること（Повторите, пожалуй-
ста）。このグループで日本の学習者のため
に非常に重要な内容としては、"繰り返すように
お願いすること"である。なぜなら、彼らは
相手の言うことを理解しないときに、再び尋ね
ることをためらうからである。

第2のグループの内容は、言語伝達の情報的
な課題の解決能力である。それらは、相手の発
言に対する反応し、事実もしくは出来事、人、
物、人と物の存在あるいは不在、物の質と所属、
行動の時間と場所、その理由について質問をす
ること、もしくは伝えることである。外国語と
してのロシア語のテストを行っている教員の直
接意見によると、要求される物の質と所属の扱
いは初步的な範囲でチェックした方がよいと述べ
ている。"何で作られたか"、"どこ産なのか"
などはこのレベルのためにまだ早いと思われる。
また、サイズを表す表現（高い低い、大きい小さい）
を導入した方が好ましいと思われる。

第3のグループには、イベント、人、物にた
いする感情を表す向きが含まれる。これは、必
要最低限のレベルで希望（Я хочу...）、お
願い（Дайте/скажите, пожа
луйста）、同意/意義（Да, нет）、
招待、拒否（Не хочу, не могу...）
を含む。ここで重要なのは、ほかの外国語であ
まり使っていない動詞の命令形の使用である。
もうひとつ大事なのは、拒否の意味を適当に表
すことである。ただ"いいえ"で断る形は無礼であ
るからである。

第4のグループは自分の態度と人々、物、事実、
行動にたいする最低限の評価（Я люблю...
）、(Мне нравится...)を表現す
る技能と関係している。

"基準"で伝達のシチュエーションが記述され、所定のレベルのテーマが与えられる。これを見ると、まず、ロシアで教育を受ける学習者のために必要なものが含まれるという印象を受け、学習者は会話できる場所として以下のところを挙げている：店、売店、レジ、郵便局、銀行、外貨両替所、レストラン、喫茶店、カフェ、食堂、図書館、教室、町、交通機関、病院、薬局である。ここで指摘したいのは、ロシアに到着したばかりの外国人のための空港と国境にある鉄道ステーションが欠けていることである。また、ロシアにおいて学習者の実際の生活の場である学生の寄宿舎（ホテル）も提示されていない。他方、現代では郵便局でのコミュニケーションはそんなに重要ではない。より大事なのは、インターネットでコミュニケーションを行うことである。

外国人は、このレベルに必要なテーマの枠にいて以下の言語伝達を実行する。自己についての話、履歴、年齢時代、教育、仕事、関心、友（知り合い、家族の一員）、家族、労働日、暇、休憩、趣味。ここのすべてのテーマは大事であるが、このレベルでバイオグラフィについての話は絶対必要と言えないであろう。"私の友"のテーマをより抽象的な"人間"にしたほうがよい。

1部のかなりのスペースが、言語活動でのスピーチ技能にたいする要求に占められる。"基準"の著者は、このレベルで学習者が扱うことができるはずのテキストの特徴に大きな注意を払っている。テキストは、機能 - 意味のタイプスピーチだと描写され、このテキストのテーマはどの範囲で使用され、テキストの量やテキストの中に未習熟の単語のパーセントで示す割合、テキストを聞く回数、発言のスピード（スピーチ活動の口頭のためのこと）が規定される。

この面で、課題の複雑化の傾向が存在する。"基準"の1999年の第1版でモノローグの聴解力の検査に提出するテキストの量は未習熟の単語が含まれていない100～120単語であるが、2001年の第2版では、量は1%の未習熟の単語が入る120～150単語までに増える。

第2版では、少しあっても、発言のスピードの中のグレーデが下がる：120～150音節/minから120～140まで。しかし、受験者がテキストを2回聞くので、多くの専門家がモノローグのスピーチのこのようなテンポを遅いと考えて、140～160音節/minまでスピードを上げるという提案がされている。

対話の聴解力に関して、第1版と比べて、第2版では対話量が4～8の表現から12の表現まで増える。また、4～6の表現からなるミニ対話の概念が導入される。さらに、今度は1%の未習熟の単語の存在が認められる。しかし、発言のスピードが160～180音節/minから120～150音節/minまで下がる。予測されるのは、対話量に表現の数だけが指定され、単語の数が指定されていないことである。ところでは、文語のテキストの方法で新しい教材資料の習得に慣れた日本の学習者のために、聴解力のテストの実際の量は非常に重要なデータである。ある研究と第1版の規範的な国家検定試験（初級レベル）では、対話量は60単語で限ると書いているが、これはあくまでも一つの対話量である。テストに対話はいくつかある。テストの作成者の話によりと、すべての対話の量は目安として120単語として考えられる。しかし、第1版の規範的なテキストの聴解力タスクを分析するところ、内容は五つの1つの問題（あわせて25単語）、四つの対話（あわせて135単語）、一つのテキスト（110単語）からなる。いずれにせよ、実際のテキストの量は基準で示されたそれを上回る。もう一つの問題、というのは聴解テストの中にある未習熟の言葉の存在は、教えられていない言葉の、前後関係による理解能力に慣れていない日本の学習者にとって、大きな壁になる可能性がある。だから、教育課程でのこのタイプの技能の練習時間を増加の必要がある。

第2版で、解読力のテキストのボリュームも200～250単語から250～300単語までに増加した。未習熟の言葉の割合の1～2%は変わらないが、専門家の間にその割合を2～
３％までに増やそうとする願望が見られる。このような変更は、「基準」の再版のときに実現されるかもしれない。

第２版で作文力関係の部分はかなりの修正を受けた。第１版では、受験者に、再生産的な発言の能力（提供されたテキストの主なポイントを新たに繰り返す能力）だけでなく、再生産的な発言の能力（独自的な発言の能力）が要求された。この場合、すでに整理されたデータの暗記に慣れた学習者は苦労するだろう。したがって、二つ目の要求が彼らにとって特に難しい。この意味で、第２版で前の「再生産的な発言」が「再生産的な発言」に変わったが、表面的に受験者の課題をよりやさしくすることに見えるが、実際に「基準」で提示している内容（コミュニケーションを始めること、質問をすること、自分の態度を表すこと）はすべて再生産的な性格を持つので、学習者のためのタスクの内容がほとんど変わらない。

作文能力に関しては、ある程度の簡略化が見られ、提出されたテキストの量が200単語を持つことで変わらないが、第１版にはなかったことで、第２版にテキストの中に１％の未習熟の言葉の存在の条件が加わった。作文能力の試験において出されるテキストのポリュームより、受験者が書かなくてはならない文句の数のほうが重要である。第１版にあった５～７文の課題は、第２版で７～１０まで増やされることになった。

口頭発表力に関しては、モノローグの課題の量は変わらない：7文である。しかし受験者が分析しなければならないテキストのポリュームは150～180単語から150～200単語まで増やし、そして１％の未習熟の単語が導入された。

対話のスピーチに関して特に数字の指標はない。それは相手の発話を理解すること、相手の伝達意向を判断すること、相手の発言に対して適宜に反応すること、対話を発起することを含む。

全体として、基準で必要とされる技能の段階（聴解力、解読力、作文力、口頭発表力、その後に大きいセクションの言語能力）は、国家検定試験が行っている、より単純なタスクからより難しいタスクへの段階（文法力と語彙力、解読力、聴解力、作文力、口頭発表力）と比べて論理的な一定性を持っていない。

しかしながら、テーマとシチュエーションの範囲、意図と伝達能力のリスト、言語活動のすべての能力に対する要求、これらはすべて初級レベルの言語伝達能力のポリュームと性質を理解するために十分なデータといえる。

"基準"の２部は、言語能力の内容を述べる。２部は次の内容を含む：音声学、造語法と形態論、単文と複文の構文論、直接的、そして間接的なスピーチ、文における単語の順序である。

このセクションは音声学から始まるが、実際にはテストでそれはチェックされていない。学習者にとってこのテーマは重要である。それはロシア語のアクセントとリズム、シンタクマ（1語または数語からなる意味上またはイントネーション上の単位）、子音の有声化と無声化は学習者にとってとても難しいからである。

"基準"の第1版では、初級レベルで必要とするイントネーション構文のタイプが指定されている。これはIK-1（完成した発話）、IK-2（専門的質問）、IK-3（一般的質問、非文尾シンタクマ）、IK-4（a接続詞を持つ対照的な質問）である。第2版でこれにIK-5（評価）が加えられる。しかし、これは初級レベルのために早すぎるかもしれない。IK-5はIK-4とともに学習者のバッショナ知識にある。イントネーション構文の知識は重要であるが、それは難しく、例えばIK-3の一般的な質問を挙げることができる。

第1版の造語法と形態論のセクションは、単語の構成に関して次の単語の語幹の概念を含む：単語の語幹と語尾。第2版ではこれに単語の語根、接尾辞（стол – столовая、город – городская、студент – студентка）、接頭辞（писать – написать）が加わっている。

第2版で初めて導入されるのは、最低限の造語法モデルの認識：учитель – учи-
тельница; иностранец; иностранка; городской; читать; прочитать; ехать; поехать; приехать; русский; по-русскиである。

最初の2つの例で、女性名詞、そして男性名詞を区別すること、3番目の例で形容詞の識別、4番目の例で動詞の識別が必要とする、これららの動詞は初級レベルの受験者にとって十分に可能なことであるが、多くの接頭辞を利用する能力を計ることができるのは難しいね。

"名詞"のセクションには内容の基本的な変化が見られない。六つの名詞変化の中で生格の意味から"名詞"が除外され（ Какое сегодня число? Первое марта）、けれども逆に、与格の意味に"何かの必要性を感じている人（人称名詞の場合だけ）"が入れられた（Мне нужно пойти в банк）。

そして、対格の意味の中に"長さ、持続時間、時を表すこと"が追加された（Я живу здесь месяц）。また、接続詞を使う造格の意味の中に"確定"が加わった（Я люблю чай с молоком）。

代名詞のセクションには、当然のこととして広く使われている人称名詞の (оно), (мы), (вы), (они)を付け加えたが、基本的な名詞の代名詞の (что), (чо)は除外された。このレベルの受験者によって、指定名詞、規定代名詞、否定代名詞の利用は、パスィヴァ知覚としてだけ意味をするしかないと思われる。第2版に、"基準"の作成者は、言語学的形態の格制度に対して"紹介"という要求を入れたが、この同じことを考慮した結果であるかもしれない。なぜならば、"紹介"はパスィヴァ知覚を意味するからである。

"動詞"セクションは重要で、そして難しい。ここであまり多くの変化がないが、(ать), (ить)の語尾を持つ不定形動詞に(мочь), (идти)動詞が加えられた。ちなみに、要求項目に含まれている動詞の過去形、現在形、未来形は初級レベルで難しく、とにかく完了体動詞の未来形の使用はパスィヴァ知識として扱わなければならない。接尾辞の交替で区別される動詞のグループの知識の要求は難しいといわなければならない。

"数字"のセクションでは主な順序数詞が付加されている（первый, второй и др）。ここで問題は次の通りである。すなわち個数詞と順序数の上限は指定されていないことである。

"副詞"のセクションの内容はそのまま残ったが、"副詞"のセクションに接続詞(из)と助詞(даже)が追加された。接続詞はロシア語で非常に重要な役割を果たすのでこの付加は正当なことである。

ロシア語において文の基礎的な構造である方法（主体 + 動詞 + 目的語）の知識を必要としているセクション"統合論"の内容は変更されていない。しかし前版の文のタイプの非常に新たられた構造は整理されている。それには、新しい構造が重要なロジックを持っていない：指定される文の4つのタイプの中に最初の2つ（疑問文と非疑問文）が意味の基準で、しかし次の2つ（1成分モデルと2成分モデル）は構造の基準の上に選択される。

第1版でまとまって記述された文法主体と論理主体は、第2版では分けられている。これは論理的な判断である。なぜなら、論理主体が意味的な主体であり、文法的な主体と異なることがある。

第2版では"複文のタイプのセクションは"統合論"の最後の場所から、"直説法と間接法"や"文における語順"より先に移された。直説法と間接法は初級レベルで分かりにくいが、それは試験での作文を書く時に重要な役割を果たしている。

特定の言語伝達の課題を解決するために、外国人は比較的自由に用語をミンラムをマスターしなければならない。第1版では初級レベルの語
3) Стародуб В.В Лингвометодические основы тестов по русскому языку как иностранным / 1 Всероссийская практическая конференция. Конструирование педагогических тестов по русскому языку как иностранному. Доклады и сообщения. ЦМО МГУ им. М.В.Ломоносова 15-16 апреля 2003 года. М., 2003, с.81.


7) Типовые тесты по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Общее владение /Андрюшина Н.П. и др. - М. - Спб.; ЦМО МГУ - "Златоуст", 1999, с.44.
About the Russian Federation State Educational Standard for Speakers of Russian as a Foreign Language (Beginner's Level) (2)

Tolstoguzov Alexander

Abstract

This article is devoted to one of the most topical issues in theory and practice of teaching Russian as a foreign language, which concerns describing different stages of language mastery (in this case elementary level) and how to measure Russian language proficiency.

In the definition of elementary level of language proficiency we can base on the requirements as stated in the Russian Federation State Educational Standard for Speakers of Russian as a Foreign Language. Elementary level is characterized by certain skills and practical communicative objectives in different areas of activity. The Standard takes into consideration the communicative situation and factors affecting it, personally oriented communicative objectives and their achievement via different communicative strategies and tactics in major types of communicative events, types of discourse and corresponding grammatical systems and vocabularies.